永山則夫 殺人犯、小説家。連続殺人事件を起して死刑になる間、獄中で創作活動を続け、その育ちや裁判が社会問題化。

ながやまのりお

三大事件・・・1949 = 北海道網走市呼人番外地で、林檎勇定職人の父と行商を営む母の子に生まれる。兄3人、姉3人。

独立回復・・・1951 = 2歳：4女誕生で8人兄妹姉妹。高校生の長兄がクラスメートの女子を妊娠させ、出産後、母が育児。

博打を好む父が失踪。小売店を営む母に連れられ兄妹姉妹は市内を移転の間、長姉が精神を病み入院。

自衛隊発足・1954 = 5歳：母が4女を連れて出奔。兄姉と両親不在のまま一冬を越す。

55年体制始・1955 = 6歳：見かねた近隣住民が福祉事務所に通報、青森県北津軽郡板柳町の母のもとに引き取られる。

国連加盟・・・1956 = 7歳：町立板柳小学校に入学。

イタタケ・1958 = **9歳**：網走の精神病院に入院中の長姉に会うとして家出、函館で保護される。以後、頻りに家出。

安保闘争・・・1960 = 11歳：

全国総合計画1962 = 13歳：岐阜県垂井町で父が死去。板柳中学校に入学。

東京初バイト 1964 = 15歳：家出し、福島駅で福島県警に保護され、母と担任教諭に引取られる。

大学紛争始・1965 = 16歳：認定卒業し、集団就職で上京。フルーツパーラーに就職するが、職場の同僚と口論し、出奔。横浜に停泊中のイギリス貨物船に無断乗船、香港から強制送還。栃木県小山市の長兄宅に身を寄せ、自動車修理工場に板金工見習いになるも、窃盗未遂で逮捕され、宇都宮少年鑑別所に収容、「不処分」の審判で、就職先の社長に引取られるも、諍い起こして辞める。

いざなぎ景気1966 = 17歳：出奔。ヒッチハイクで大阪へ行き、守口市の米穀店に就職する際に取寄せた戸籍謄本で、本籍住所が「網走番外地」と知り衝撃、提出せずに退出。東京へと向かい、池袋の喫茶店、羽田のホテルのボーイなどするも、トラブルで退職。横浜で沖仲仕の仕事が始めるが、在日米海軍基地に侵入、自動販売機からコインを窃取して逮捕され、横浜少年鑑別所に移送。「試験観察」となり、川崎市新丸子のクリーニング店に「補導委託」され、以後、毎月面接され家裁調査官に高校への進学を希望。

美濃部都知事1967 = **18歳**：クリーニング店を解雇され、淀橋の牛乳販売店で住込み。明大付属中野高校(定時制)に入学。「試験観察」が終了し、成人までの「保護観察」となるが、退職。学校も欠席し除籍処分。巣鴨の牛乳販売店で住込み。

電ヶ関ビル・1968 = 19歳：酒に酔って部屋の畳を焦がし、依頼退職。ヒッチハイクで大阪に向かい、神戸港でフランスの貨物船に無断乗船を試みるも発見され、手首をナイフで切って自殺未遂。出入国管理令違反の審判が「不処分」となり、杉並区大宮前の牛乳販売店に住込み。明大付属中野高校(定時制)に再入学し、クラス委員長に選ばれるも束の間、集金を持ち逃げ、学校も中退、青森の母のもとに行く。***自衛隊入隊を志願、1次試験には合格するも保護観察中のため入隊不可。横須賀の在日米海軍基地に侵入し、留守宅から拳銃、実弾を窃取。東京プリンスホテルの敷地内でパトロール中のガードマンを殺害、京都市東山区の八坂神社境内で、警備員を殺害。次兄宅に無心しに訪れ、犯行を告白後、北海道七飯町と名古屋市港区で、タクシートの運転手を殺害し現金を強奪。逃走中、諸所に侵入して現金等盗み、**

全共闘・・・1969 = 20歳：**歌舞伎町のジャズ喫茶に職を得るも、千駄ヶ谷のビジネススクールに侵入、ガードマンに発見され、発砲して逃走。代々木の路上で現行犯逮捕。各事件で再逮捕が続く、弁護団が形成される。「刑事処分相当」で東京家庭裁判所に送致も、東京少年鑑別所送致となり、収容初日に首吊り自殺を図るが未遂。母親と面会も、「おふくろは、オレを3回捨てた」の一言のみ。東京拘留所へ移送となる。「無知の涙」執筆開始。(週刊プレイボーイ)が「連続射殺犯・永山則夫の手記」を掲載。第6回公判まで開かれるが進展無し。**

大阪万博・・・1970 = 21歳：**第12回公判で尋問中に興奮し、突如、英文の暗唱(ウィリアム・ボンガー著「犯罪と経済状態」の1節)を始める。「無知の涙」の「ノート-0」了。第18回公判で、弁護人は獄中手「無知の涙」の「ノート-1」から「ノート9」までのコピーを証拠申請。裁判所は精神鑑定の採用を決定。**

トシヨク・・・1971 = 22歳：**「精神鑑定の結果は「そこには純真な一青年の姿があったのみである」。**第20回公判で、自らの希望で「ノート-0」から「ノート-2」までを証拠申請。合同出版より「無知の涙」が刊行される。東京拘留所(旧巣鴨プリズン)が廃監となり、旧小菅刑務所が新たに東京拘留所に改称され、収容者が一斉移動。第24回公判で、検察が死刑を求刑。弁護団を突如解任、5人の弁護人からなる第2次弁護団となる。支援者による「公判対策会」が発足。「ノート-4」(「詩or屍」)執筆開始。辺境社より「人民をわすれたカナリアたち」刊行。

沖縄返還・・・1972 = 23歳：**「動揺記」執筆開始。弁護側の冒頭陳述開始。原稿用紙2千枚超で、朗読に1年を要することに。**

石油ショック1973 = 24歳：**「合同出版より「愛か〜無か」刊行。辺境社より「動揺記1」刊行。弁護団の求めで精神再鑑定決定も、**

角栄金脈辞任1974 = 25歳：**不服として第2次弁護団を解任、(永山則夫公判対策会)も機能停止。以後、弁護人定まらず。**

ケアンズ事件1975 = 26歳：裁判支援グループが発足、資金カンパの呼び掛け、獄中手記を中心とするパンフレットの発行等を行なう。

田中角栄逮捕1976 = **27歳**：第3次弁護団結成。

JALハイジャック・1977 = 28歳：裁判支援グループが東京と大阪に分裂。「JAC出版より「反-寺山修司論」刊行。国会で、この年起きた「日航機ダッカ事件」を機に高まった「弁護人抜き裁判」を可能とするよう、刑事訴訟法の改正を求める決議。**法制審議会が「弁護人抜き裁判」を答申。ノート「回復記」、ノート29」(「Essay」)執筆開始。第61回公判で、開廷直後に弁護人に詰め寄り、怒号を上げ着席を命じられるも暴れ続け、退廷。**

革新大敗北・1979 = 30歳：***第63回公判で検察が再び、死刑を求刑。「弁護人を解任しろ」と発言し、退廷。最高裁・法務省・日弁連の3者が合意し「弁護人抜き裁判」法案を審議未了で廃案に決定。第66回公判でも、開廷直後に、机を叩き「今からこの法廷を人民法廷にする」と叫んで退廷。死刑判決が宣告され、第4次弁護団は控訴手続き。**

貿易摩擦始・1980 = 30歳：**文通していた新垣和美がアメリカから来日、面会をはたし、結婚。**

・・・1981 = 32歳：**妻和美が、主任弁護人とともに、名古屋事件の被害者の遺族の許を訪れる。以後、折につけ各事件被害者遺族の許を訪ね、謝罪と慰霊を行なう。控訴審第5回公判で、原判決を破棄し、無期懲役の判決。東京高等検察庁は最高裁判所に異例の上告。「学習ノート」執筆。**

中曾根内閣・1982 = 33歳：

ドイツニラト 1983 = 34歳：**第19回新日本文学賞。小説「なぜか、アバシリ」「螺旋」脱稿。小説「土堤」を書き(新日本文学)に掲載される。「文学ノート」の執筆を開始。最高裁原判決の破棄と東京高裁への差し戻し判決。**

・・・1984 = 35歳：次兄が死去。小説「死刑の涙」脱稿。

ジャンク機墜落1985 = **36歳**：妻和美との面会が途絶えがちになる。{文藝}編集部からの依頼で、小説「破流」に着手。

バブル始・・・1986 = 37歳：第7次弁護団も事実上崩壊。協議離婚。言葉社より「ソオ連の旅芸人パロール・パロディスト氏の1日」刊行。{文藝}に小説「破流」発表。

竹下登内閣・1987 = 38歳：{文藝}に小説「捨て子ごっこ」発表。

リクルート事件・1988 = 39歳：{文藝}に小説「残雪」「なぜか、海」発表。

昭和天皇没・1989 = 40歳：{文藝}に小説「陸の眼」発表。

ドイツ統一・・・1990 = 41歳：**「編集者からの勧めで、日本文芸家協会理事会に入会を申込みが拒否される。最高裁で上告棄却され、死刑が確定。{文藝}に小説「異水」発表。朝日新聞社から「永山則夫の獄中読書記〜死刑確定前後」刊行。**

55年体制終・1993 = 44歳：

自社さ連立・1994 = **45歳**：

金融破綻・・・1997 = 48歳：

東京拘留所内で死刑が執行され、没した。

生前の遺言に従い、前妻和美によって遺骨を網走沖のオホーツク海に流す。冒険社から「遺稿集日本」刊行。

河出書房新社から長編小説「華」全4巻刊行。